

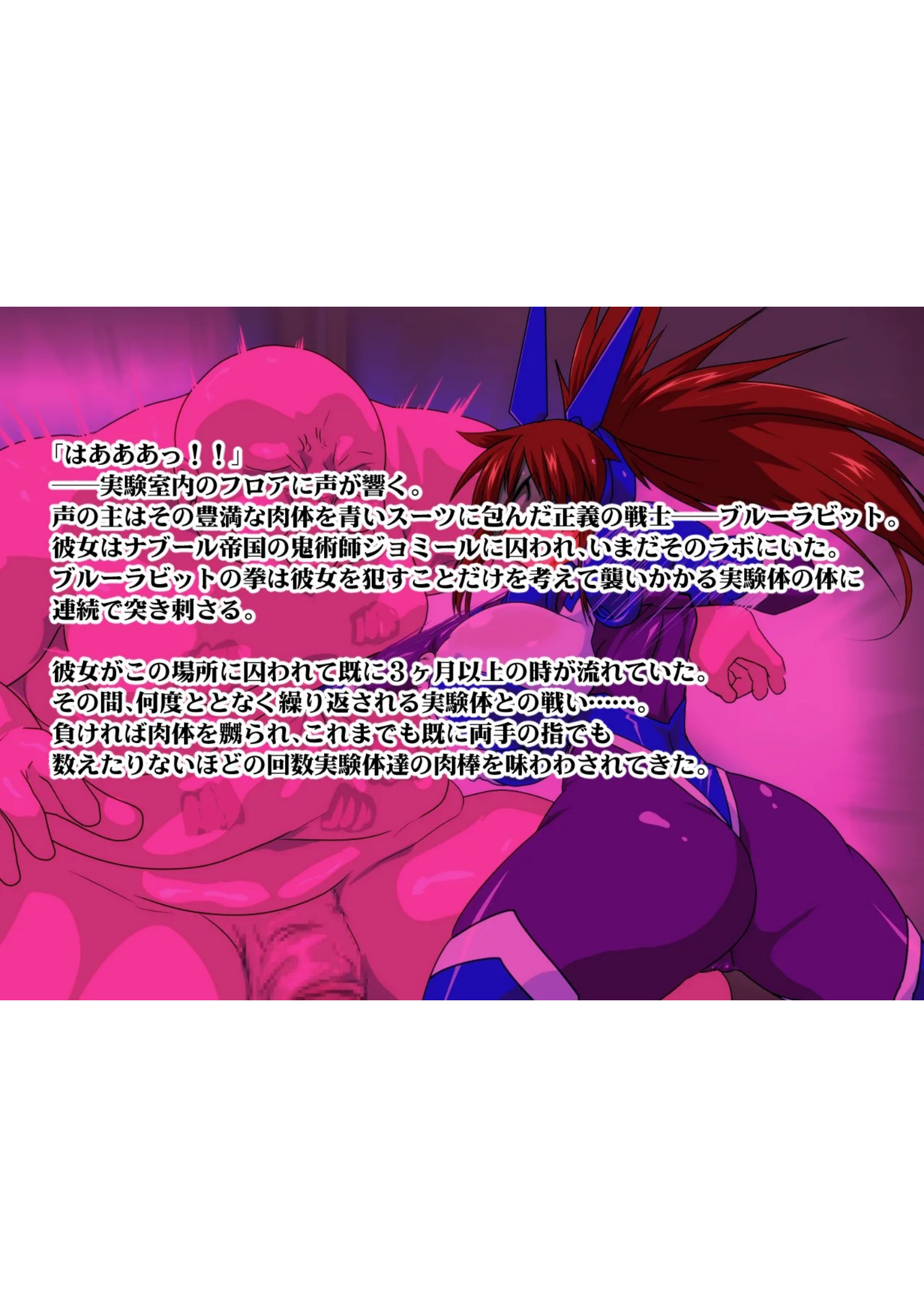
闇に堕ちる爆乳変身ヒロイン

いかにして彼女は

その身を黒く

染めたのか？

獣
ビーストファイター
SP06



「はあああっ！！」

——実験室内のフロアに声が響く。

声の主はその豊満な肉体を青いスーツに包んだ正義の戦士——ブルーラビット。
彼女はナブール帝国の鬼術師ジョミールに囚われ、いまだそのラボにいた。
ブルーラビットの拳は彼女を犯すことだけを考えて襲いかかる実験体の体に
連続で突き刺さる。

彼女がこの場所に囚われて既に3ヶ月以上の時が流れていた。

その間、何度ととなく繰り返される実験体との戦い……。

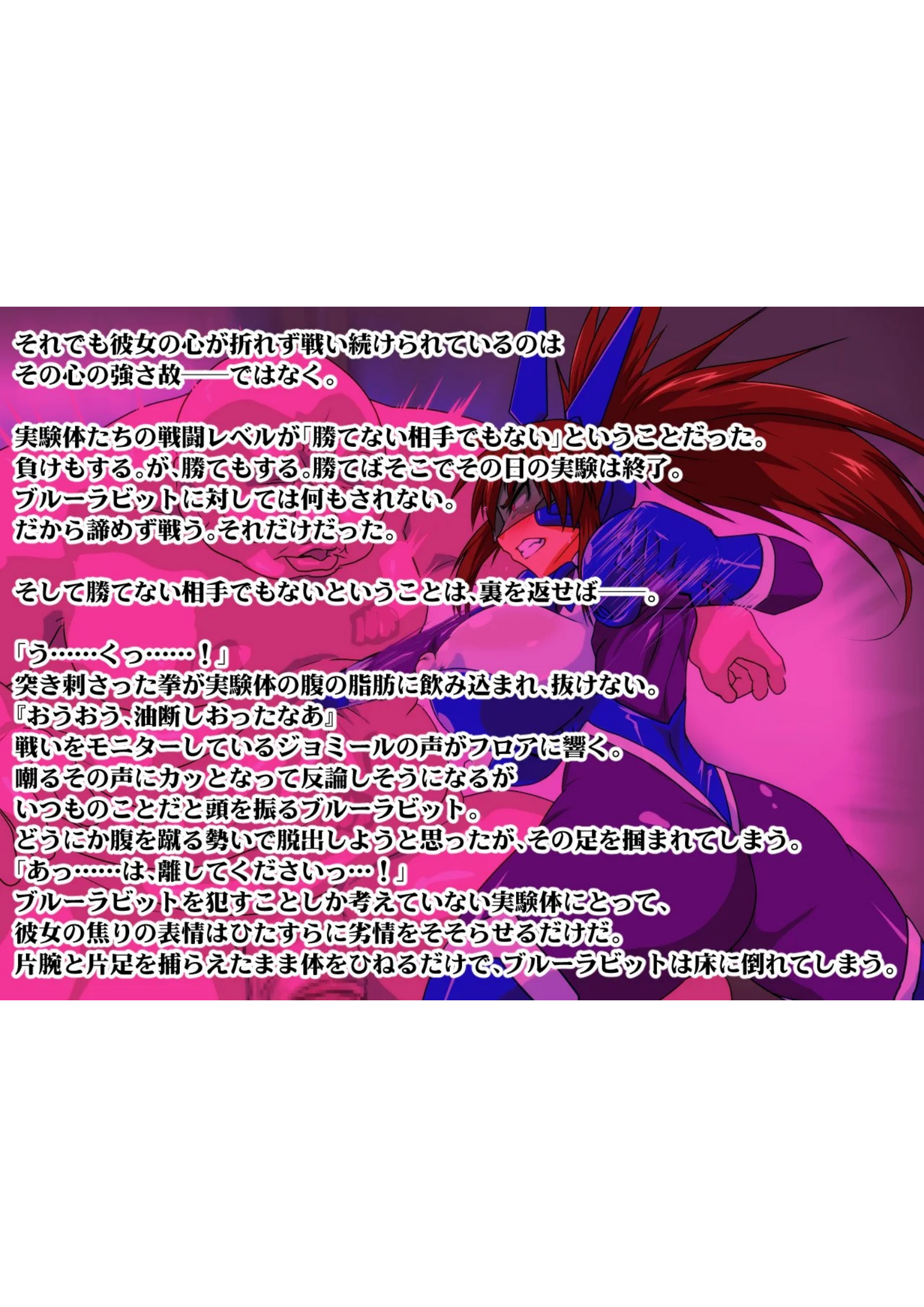
負ければ肉体を捌られ、これまでも既に両手の指でも
数えたりないほどの回数実験体達の肉棒を味わわされてきた。



やあっ!!

はあっ!!

倒れてください!!



それでも彼女の心が折れず戦い続けられているのは
その心の強さ故——ではなく。

実験体たちの戦闘レベルが「勝てない相手でもない」ということだった。
負けもする。が、勝てもする。勝てばそこでその日の実験は終了。
ブルーラビットに対しては何もされない。
だから諦めず戦う。それだけだった。

そして勝てない相手でもないということは、裏を返せば——。

「う……くっ……！」

突き刺さった拳が実験体の腹の脂肪に飲み込まれ、抜けない。

『おうおう、油断しおったなあ』

戦いをモニターしているジョミールの声がフロアに響く。

嘲るその声にカッとなって反論しそうになるが

いつものことだと頭を振るブルーラビット。

どうにか腹を蹴る勢いで脱出しようと思ったが、その足を掴まれてしまう。

「あっ……は、離してくださいっ…！」

ブルーラビットを犯すことしか考えていない実験体にとって、

彼女の焦りの表情はひたすらに劣情をそそらせるだけだ。

片腕と片足を捕らえたまま体をひねるだけで、ブルーラビットは床に倒れてしまう。



……そう。勝てない相手でもないということは、
場合によっては「負ける可能性もある相手」でも
あるということだった。

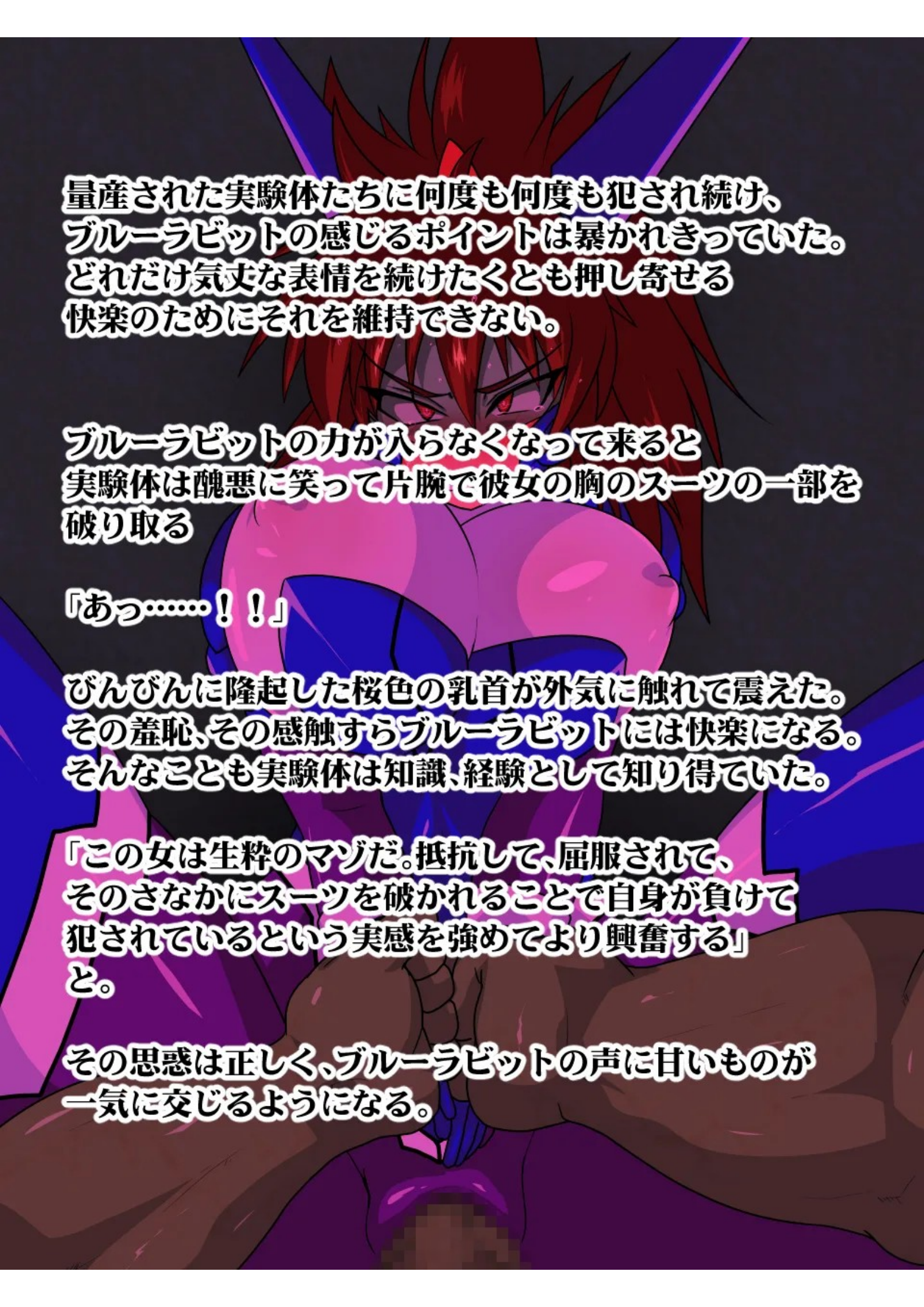
床に倒れたブルーラビットの両腕をつかみ、
足の間に体をねじ込むと実験体は自身の剛直を
スーツの上から彼女の秘裂に突き刺す。
若干の抵抗感がありつつも、
彼女のそこは簡単に入れられてしまう。





突かれるたびに豊満な胸が揺れ、背筋に快感が奔る。
だがブルーラビット感じている顔を見せてなるものか、
と気丈に実験体を睨みつける。
しかし繰り返すとおり、実験体はブルーラビットを
屈服させ陵辱することのみを考えて行動している。
その表情はただただ喜ばせる他ない。
ブルーラビット自身そのことも理解しているが、
かと言って素直に受け入れてやれるはずもなく……。





量産された実験体たちに何度も何度も犯され続け、ブルーラビットの感じるポイントは暴かれきっていた。どれだけ気丈な表情を続けたくとも押し寄せる快樂のためにそれを維持できない。

ブルーラビットの力が入らなくなると実験体は醜惡に笑って片腕で彼女の胸のスーツの一部を破り取る

「あっ……！！」

びんびんに隆起した桜色の乳首が外気に触れて震えた。その羞恥、その感触すらブルーラビットには快樂になる。そんなことも実験体は知識、経験として知り得ていた。

「この女は生粋のマゾだ。抵抗して、屈服されて、そのさなかにスーツを破かれることで自身が負けて犯されているという実感を強めてより興奮する」と。

その思惑は正しく、ブルーラビットの声に甘いものが一気に交じるようになる。





実験体が一気にピストンを早めていくと、
裕は全く無くなり大きく喘ぎ声をあげるブルーラビット。
何度となく繰り返された流れ。

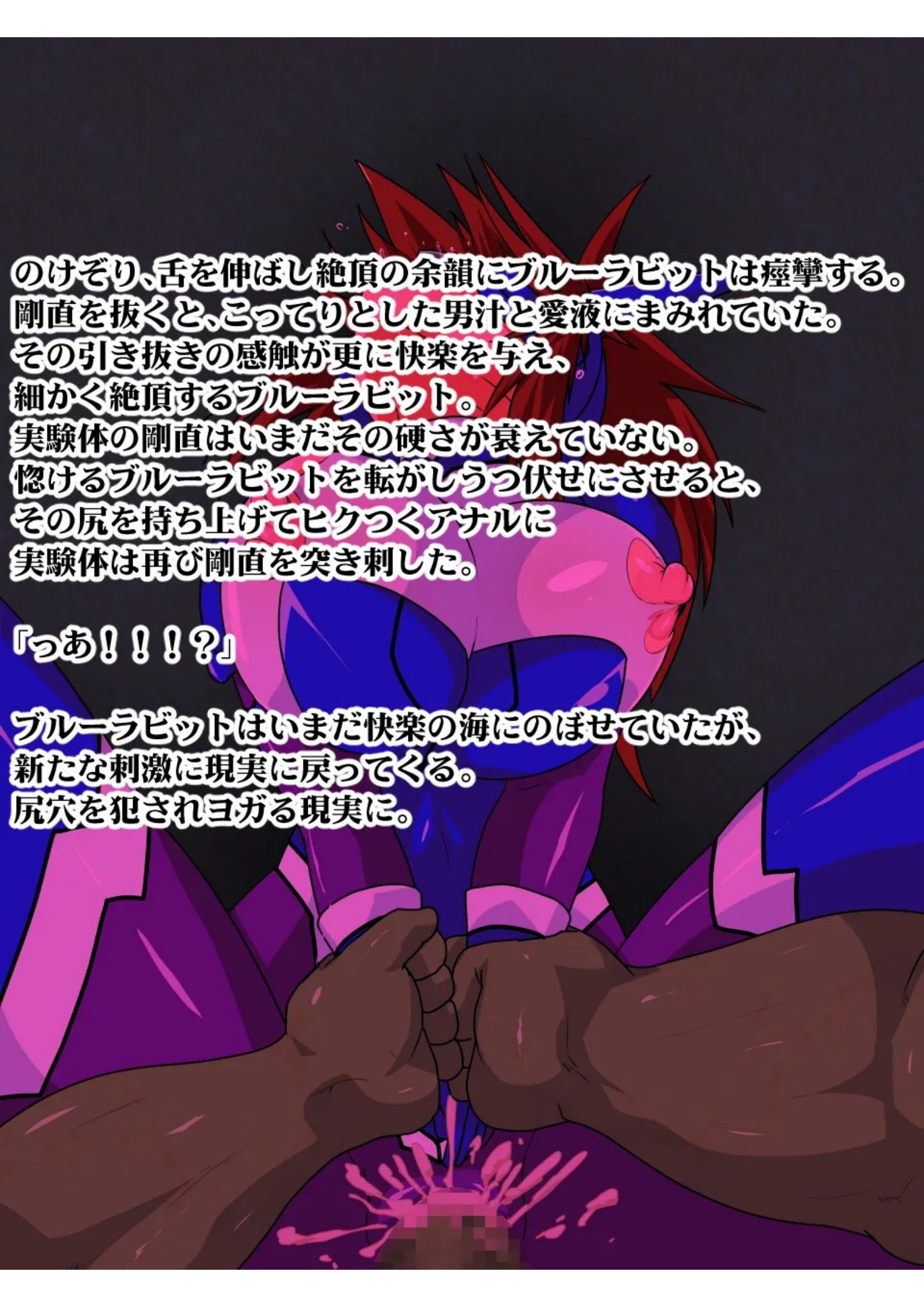




実験体が一気にピストンを早めていくと、
余裕は全く無くなり大きく喘ぎ声をあげるブルーラビット。
何度となく繰り返された流れ。

実験体は完全に目の前のメスが自分に屈服したことに
満足すると、その征服の証のように精を彼女の中に放った。





のけぞり、舌を伸ばし絶頂の余韻にブルーラビットは痙攣する。
剛直を抜くと、こってりとした男汁と愛液にまみれていた。
その引き抜きの感触が更に快楽を与え、
細かく絶頂するブルーラビット。
実験体の剛直はいまだその硬さが衰えていない。
惚けるブルーラビットを転がしうつ伏せにさせると、
その尻を持ち上げてヒクつくアナルに
実験体は再び剛直を突き刺した。

『っあ！！！？』

ブルーラビットはいまだ快楽の海にのぼせていたが、
新たな刺激に現実に戻ってくる。
尻穴を犯されヨガる現実。

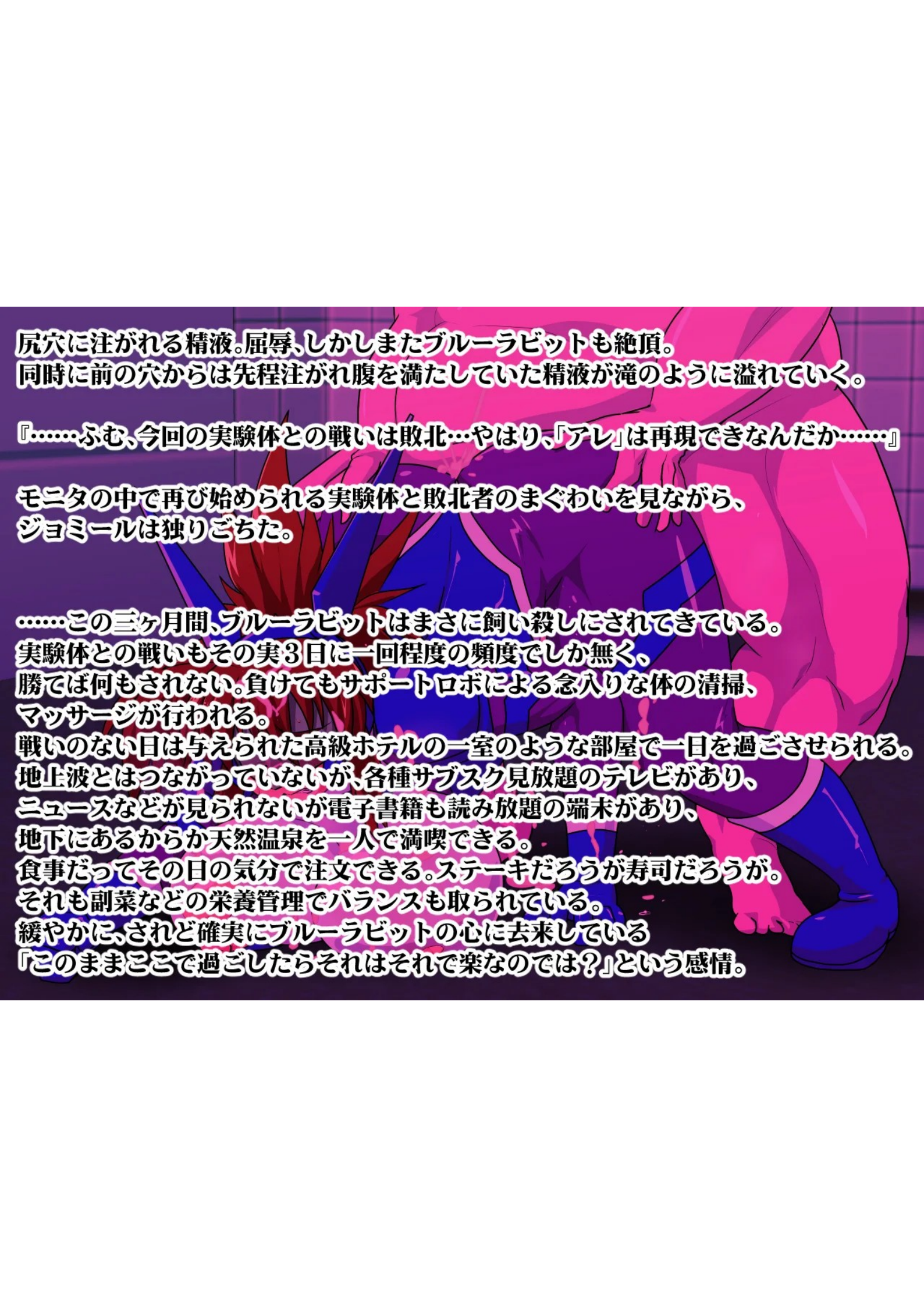




『ふっ！ うんっ…！ んあぁっ！ いやあぁっ…！！』
獣のように四つん這いになり、尻を突き上げ、その穴を犯される。
正義の戦士であつたはずの自分が。
囚われ、敗北し、こんな淫らなことに悦びを覚えてしまっている。

その、なんと背徳的な情動か。
自分の中の葛藤と自問自答が、自責が、自虐が、
彼女の被虐嗜好を刺激し快楽を高めていく。



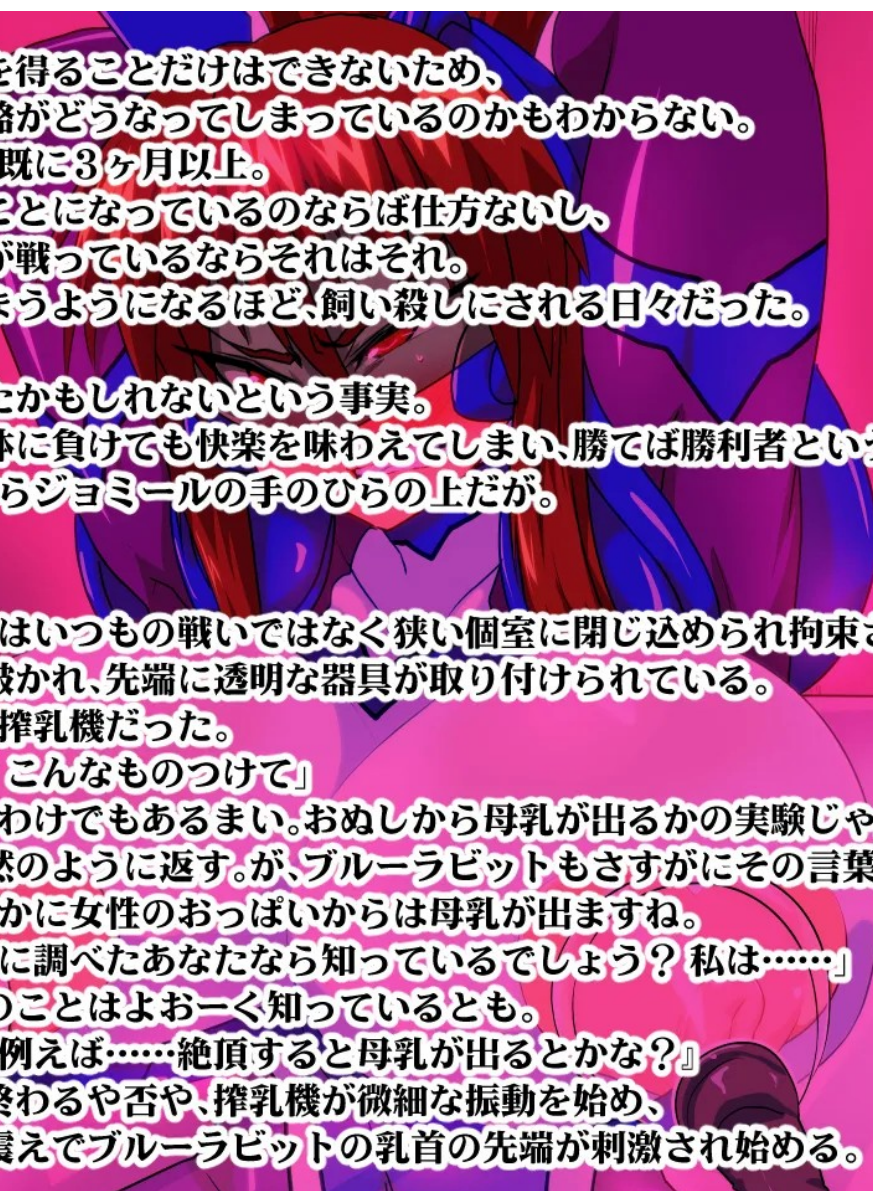


尻穴に注がれる精液。屈辱、しかしまたブルーラビットも絶頂。
同時に前の穴からは先程注がれ腹を満たしていた精液が滝のように溢れていく。

『……ふむ、今回の実験体との戦いは敗北…やはり、「アレ」は再現できなんだか……』

モニタの中で再び始められる実験体と敗北者のまぐわいを見ながら、
ジョミールは独りごちた。

……この三ヶ月間、ブルーラビットはまさに飼い殺しにされてきている。
実験体との戦いもその実3日に一回程度の頻度でしか無く、
勝てば何もされない。負けてもサポートロボによる念入りの体の清掃、
マッサージが行われる。
戦いのない日は与えられた高級ホテルの一室のような部屋で一日を過ごさせられる。
地上波とはつながっていないが、各種サブスク見放題のテレビがあり、
ニュースなどが見られないが電子書籍も読み放題の端末があり、
地下にあるからか天然温泉を一人で満喫できる。
食事だってその日の気分で注文できる。ステーキだろうが寿司だろうが。
それも副菜などの栄養管理でバランスも取られている。
緩やかに、されど確実にブルーラビットの心に去来している
『このままここで過ごしたらそれはそれで楽なのでは?』という感情。



残念ながら外の情報を得ることだけはできないため、
今ナブール帝国の侵略がどうなっているのかもわからない。
だが、彼女が囚われて既に3ヶ月以上。
取り返しのつかないことになっているのならば仕方がないし、
自分に代わって誰かが戦っているならそれはそれ。
そんな風に考えてしまうようになるほど、飼い殺しにされる日々だった。

ナブール帝国に負けたかもしれないという事実。
しかしここでは実験体に負けても快楽を味わえてしまい、勝てば勝利者という優越感。
無論、そのバランスすらジョミールの手のひらの上だが。

後日、ブルーラビットはいつもの戦いではなく狭い個室に閉じ込められ拘束されていた。
胸部分はハート型に破かれ、先端に透明な器具が取り付けられている。
それは……いわゆる、搾乳機だった。

『……何の冗談です？ こんなものつけて』

『それがなにか知らんわけでもあるまい。おぬしから母乳が出るかの実験じゃ』

ジョミールがさも当然のように返す。が、ブルーラビットもさすがにその言葉には鼻で笑う。

『ああ…妊娠したら確かに女性のおっぱいからは母乳が出ますね。』

でも、私の体を念入りに調べたあなたなら知っているでしょう？ 私は……』

『ああ、お前さんの体のことはよおーく知っているとも。』

お前さん以上にの。例えば……絶頂すると母乳が出るとかな？』

ジョミールの言葉が終わるや否や、搾乳機が微細な振動を始め、
低周波のような淡い震えでブルーラビットの乳首の先端が刺激され始める。

ふふふ…どうかな？
乳首への刺激で
気持ちよくなつて
母乳が溢れそうに
なっているのではないか？

馬鹿なことを…っ
か…感じたからって…
これで母乳が出るはず
ないでしょうっ…

ほう…？
感じているのは
否定せんのだなあ？
くくっ…

っ…！

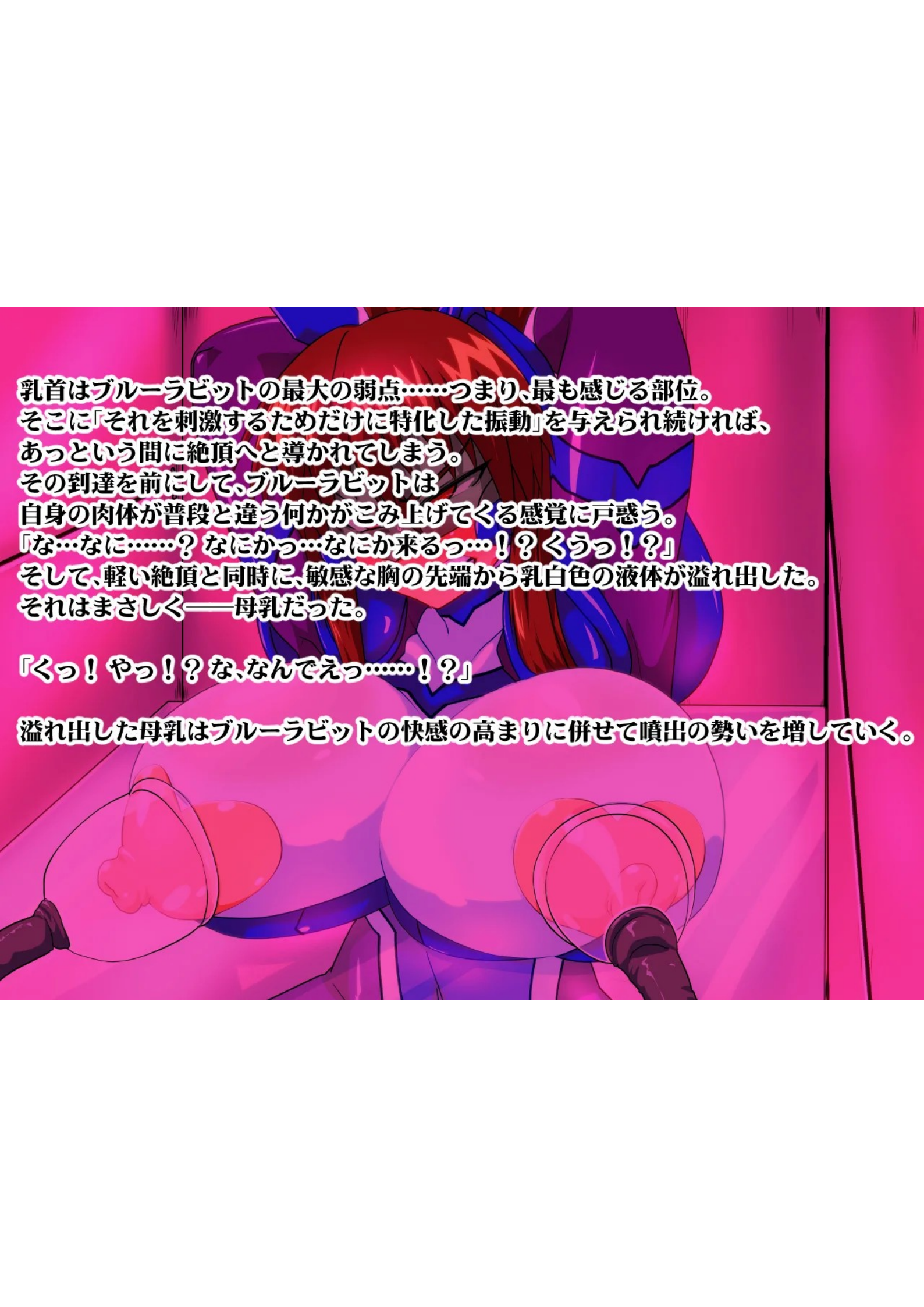
ぷるっ

ぷるっ

グ

グ





乳首はブルーラビットの最大の弱点……つまり、最も感じる部位。
そこに「それを刺激するためだけに特化した振動」を与えられ続ければ、
あっという間に絶頂へと導かれてしまう。
その到達を前にして、ブルーラビットは
自身の肉体が普段と違う何かがこみ上げてくる感覚に戸惑う。
「な…なに……？ なにかっ…なにか来るっ…！？ くうっ！？」
そして、軽い絶頂と同時に、敏感な胸の先端から乳白色の液体が溢れ出した。
それはまさしく——母乳だった。

「くっ！ やっ！？ な、なんでえっ……！？」

溢れ出した母乳はブルーラビットの快感の高まりに併せて噴出の勢いを増していく。

んっ…
ああっ!?

なっ…
なんでっ…
なんでわたしっ…

母乳…がっ…!?

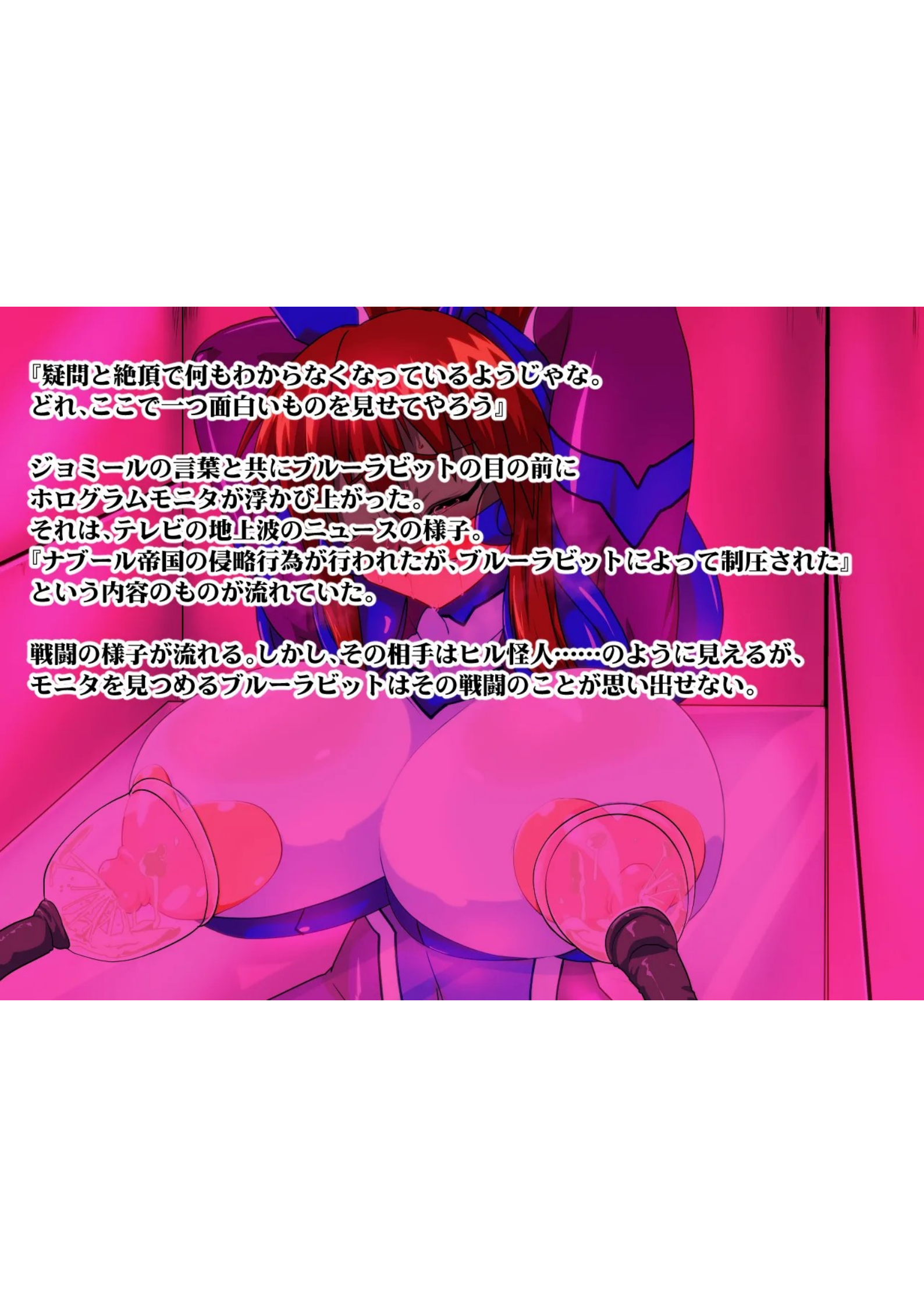
ひよひよひよっ
出よる出よるまるで
乳牛のようじゃなあ





搾乳機はブルーラビットの出す母乳を吸い続け、また刺激も与え続ける。
ブルーラビットは自身の体から出るはずのない母乳が今、
吸い続けられている戸惑いと乳首への刺激、
また母乳を出すことで感じてしまう快樂でどうにかなりそうだった。

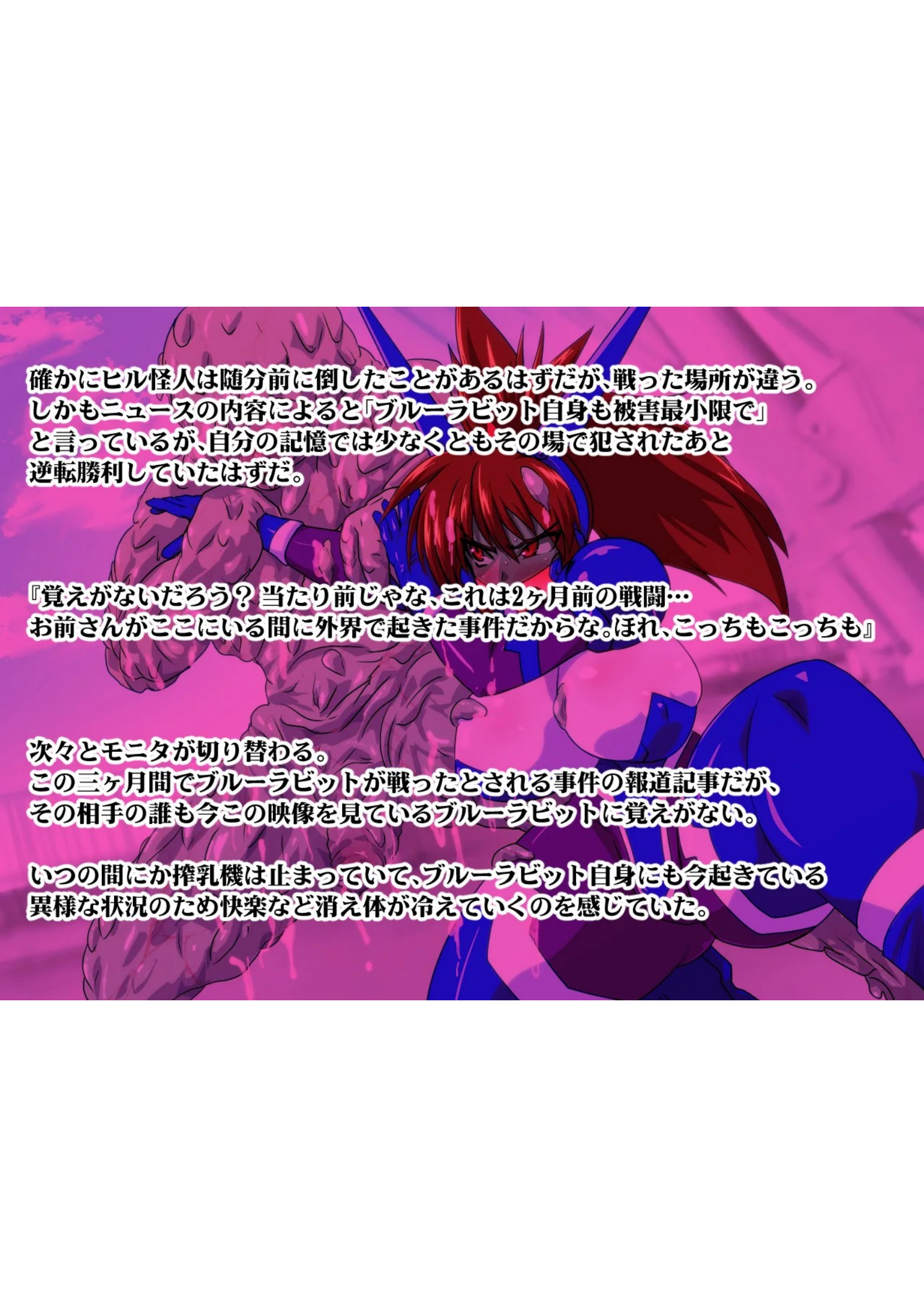




『疑問と絶頂で何もわからなくなっているようじゃな。
どれ、ここで一つ面白いものを見せてやろう』

ジョミールの言葉と共にブルーラビットの目の前に
ホログラムモニタが浮かび上がった。
それは、テレビの地上波のニュースの様子。
『ナブール帝国の侵略行為が行われたが、ブルーラビットによって制圧された』
という内容のものが流れていた。

戦闘の様子が流れる。しかし、その相手はヒル怪人……のように見えるが、
モニタを見つめるブルーラビットはその戦闘のことが思い出せない。

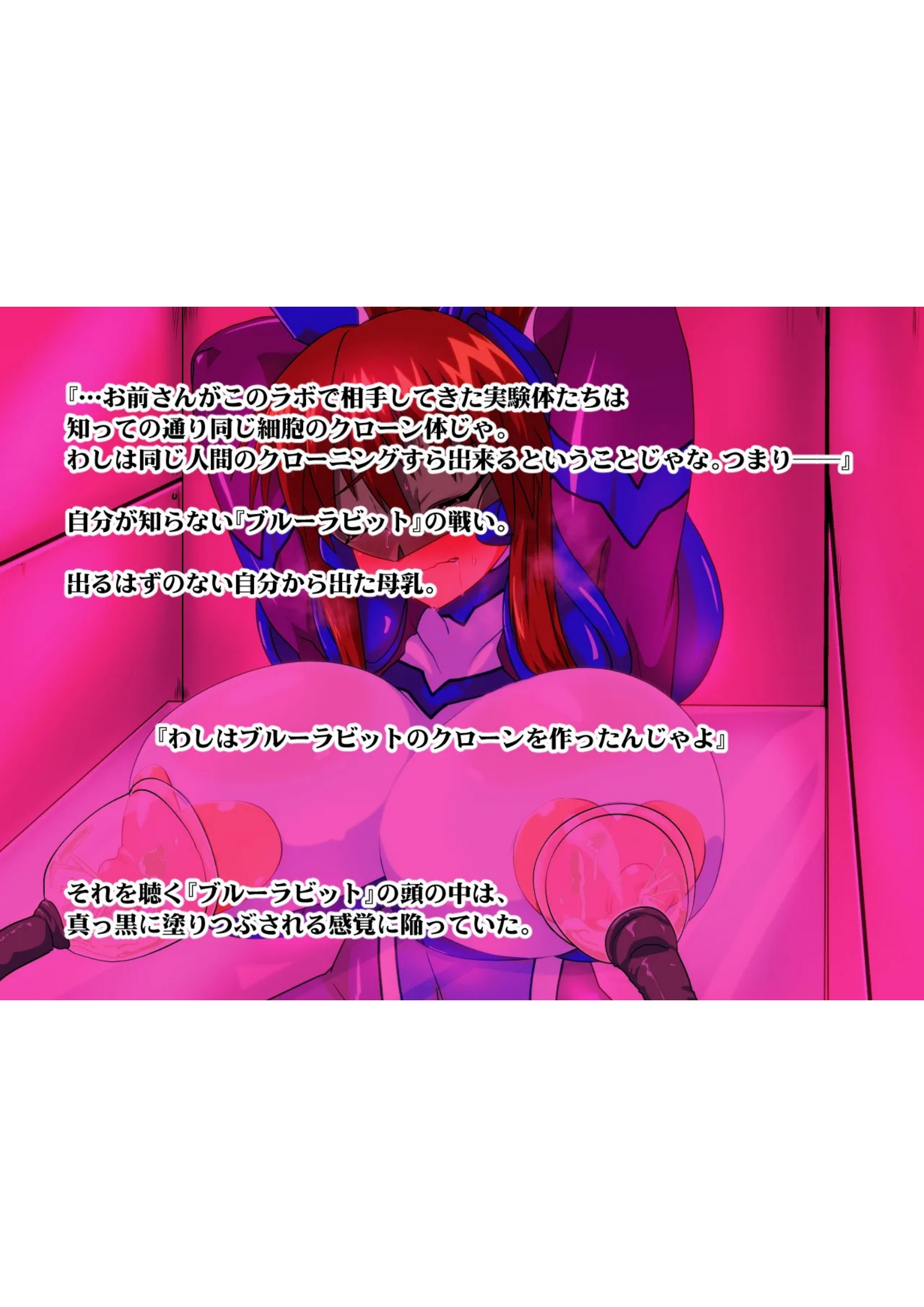


確かにヒル怪人は随分前に倒したことがあるはずだが、戦った場所が違う。しかもニュースの内容によると「ブルーラビット自身も被害最小限で」と言っているが、自分の記憶では少なくともその場で犯されたあと逆転勝利していたはずだ。

『覚えがないだろう？ 当たり前じゃな、これは2ヶ月前の戦闘…お前さんがここにいる間に外界で起きた事件だからな。ほれ、こっちもこっちも』

次々とモニタが切り替わる。この三ヶ月間でブルーラビットが戦ったとされる事件の報道記事だが、その相手の誰も今この映像を見ているブルーラビットに覚えがない。

いつの間にか搾乳機は止まっていて、ブルーラビット自身にも今起きている異様な状況のため快楽など消え体が冷えていくのを感じていた。



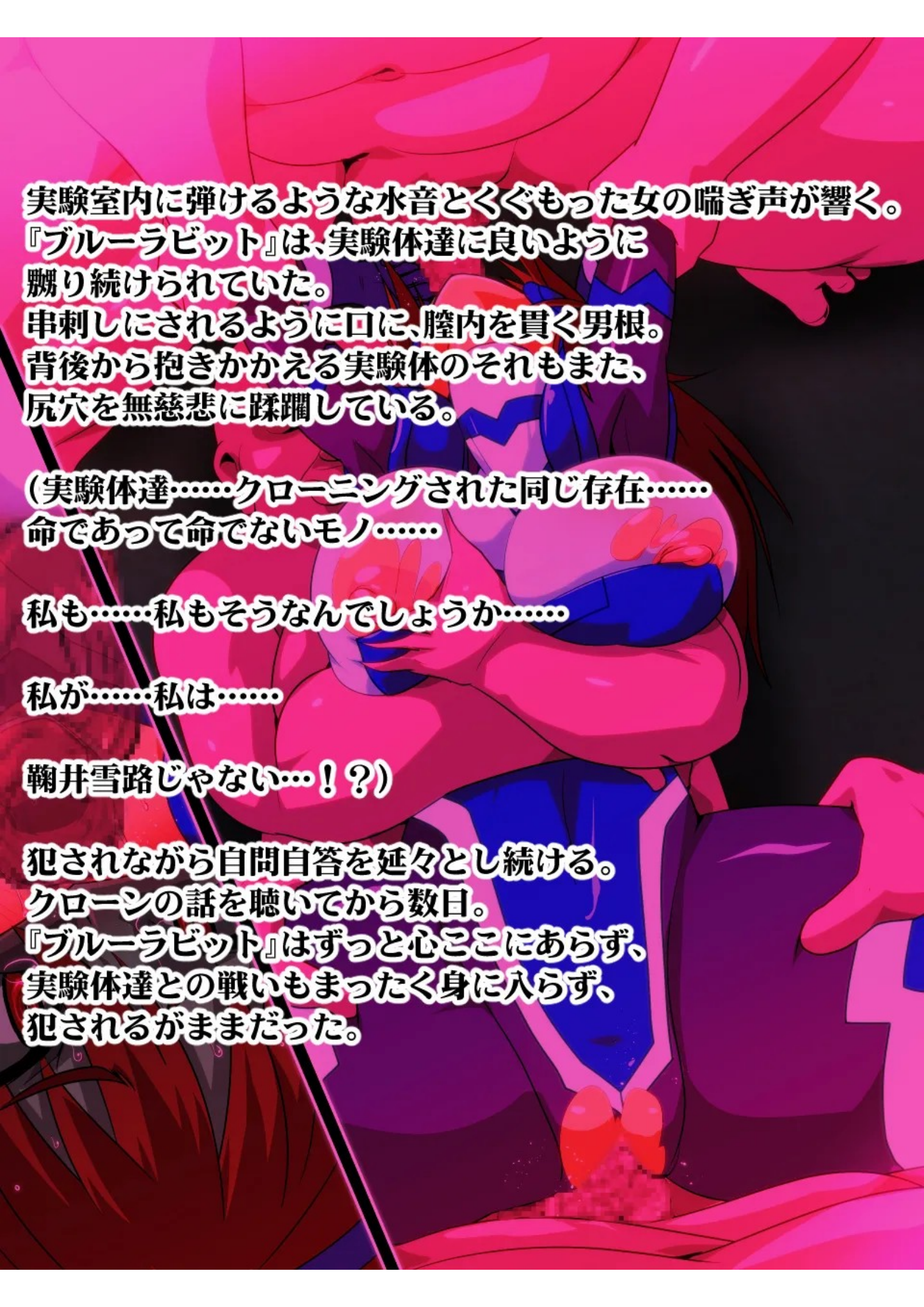
『…お前さんがこのラボで相手してきた実験体たちは
知っての通り同じ細胞のクローン体じゃ。
わしは同じ人間のクローニングすら出来るということじゃな。つまり——』

自分が知らない『ブルーラビット』の戦い。

出るはずのない自分から出た母乳。

『わしはブルーラビットのクローンを作ったんじゃよ』

それを聴く『ブルーラビット』の頭の中は、
真っ黒に塗りつぶされる感覚に陥っていた。



実験室内に弾けるような水音とくぐもった女の喘ぎ声が響く。
『ブルーラビット』は、実験体達に良いように
嬲り続けられていた。
串刺しにされるように口に、膣内を貫く男根。
背後から抱きかかえる実験体のそれもまた、
尻穴を無慈悲に蹂躪している。

(実験体達……クローニングされた同じ存在……
命であって命でないモノ……)

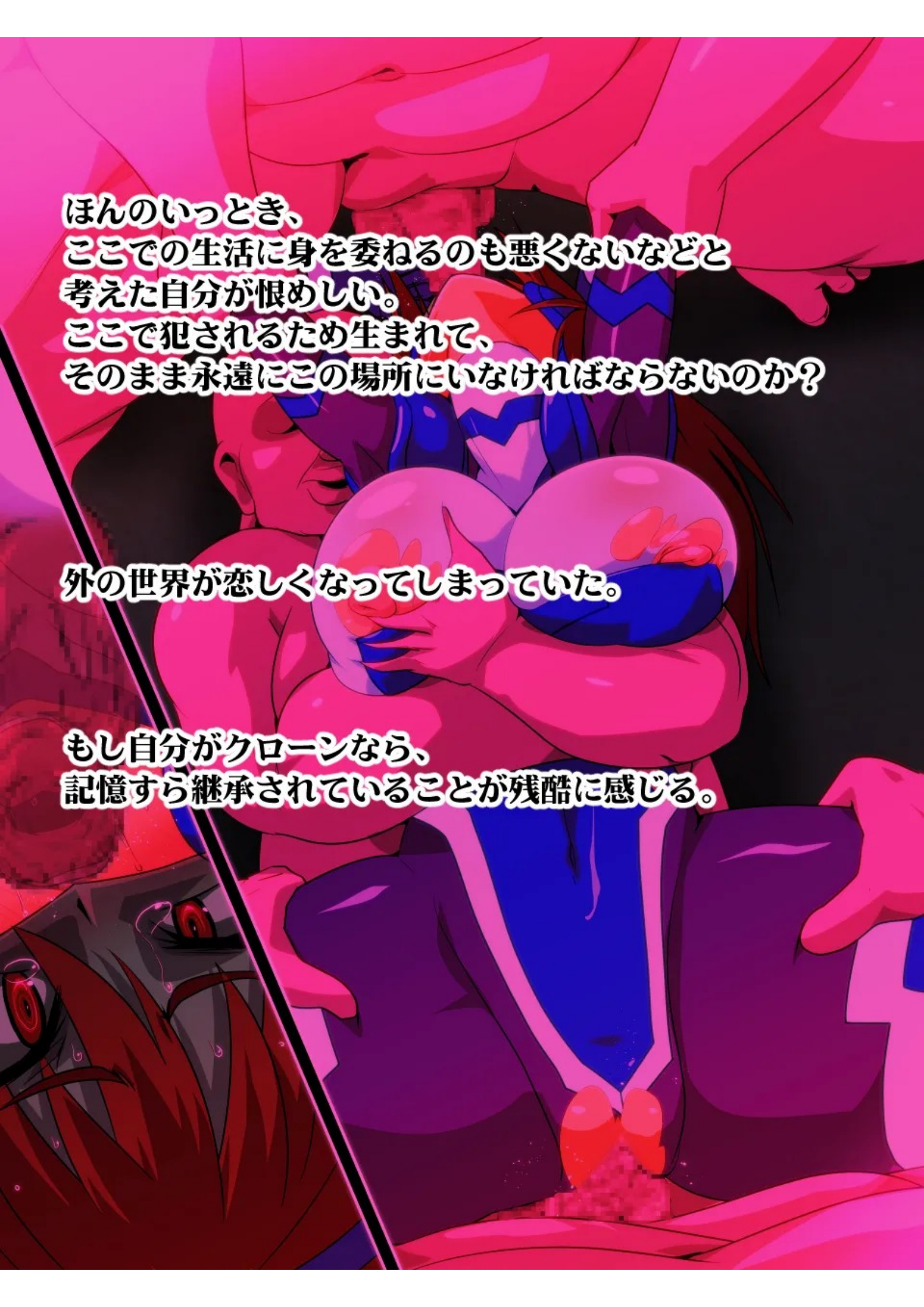
私も……私もそうなんでしょうか……

私が……私は……

鞠井雪路じゃない…！?)

犯されながら自問自答を延々とし続ける。
クローンの話を聴いてから数日。
『ブルーラビット』はずっと心ここにあらず、
実験体達との戦いもまったく身に入らず、
犯されるがままだった。



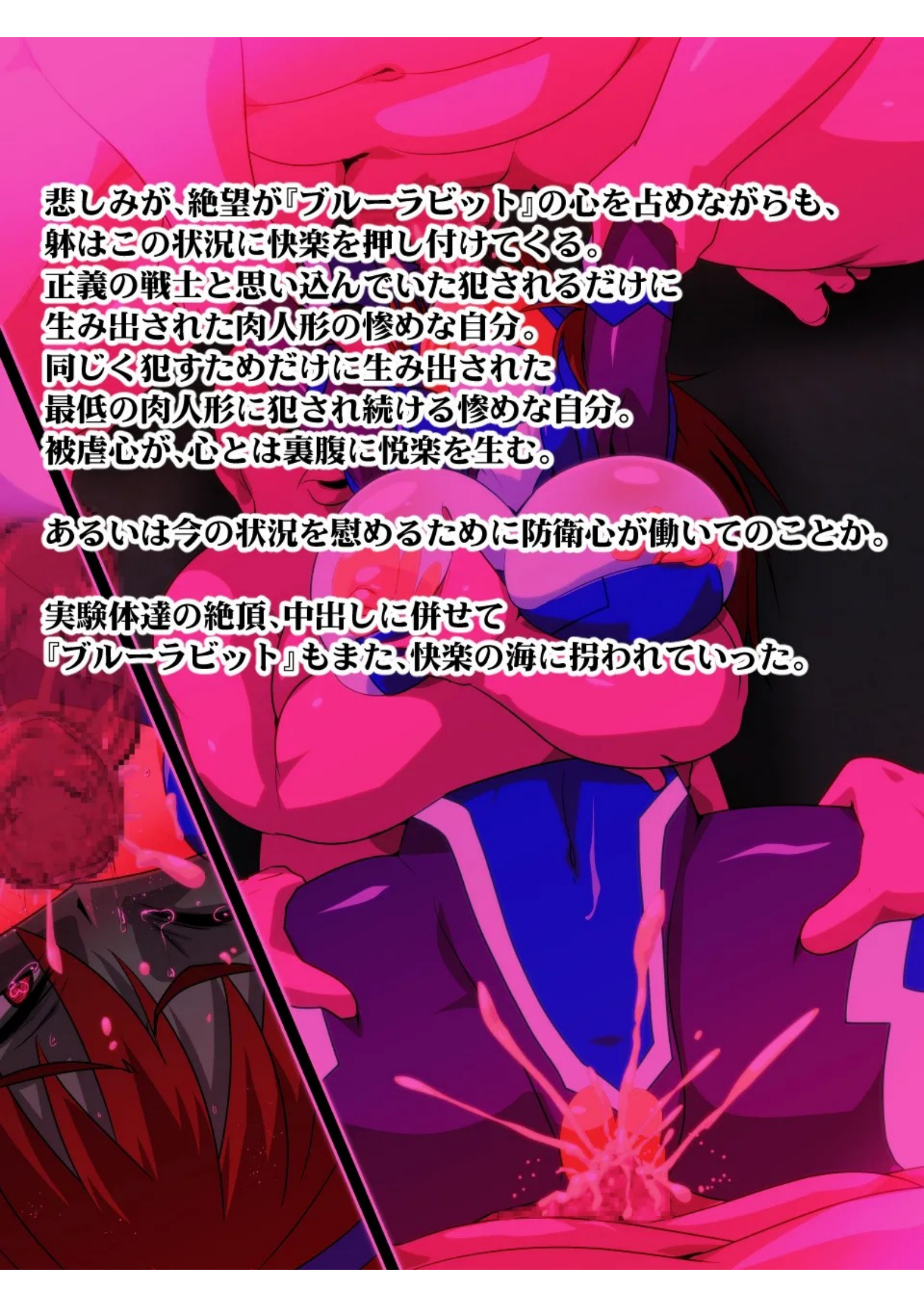


ほんのいつとき、
ここでの生活に身を委ねるのも悪くないなどと
考えた自分が恨めしい。
ここで犯されるため生まれて、
そのまま永遠にこの場所にいなければならないのか？

外の世界が恋しくなってしまうていた。

もし自分がクローンなら、
記憶すら継承されていることが残酷に感じる。

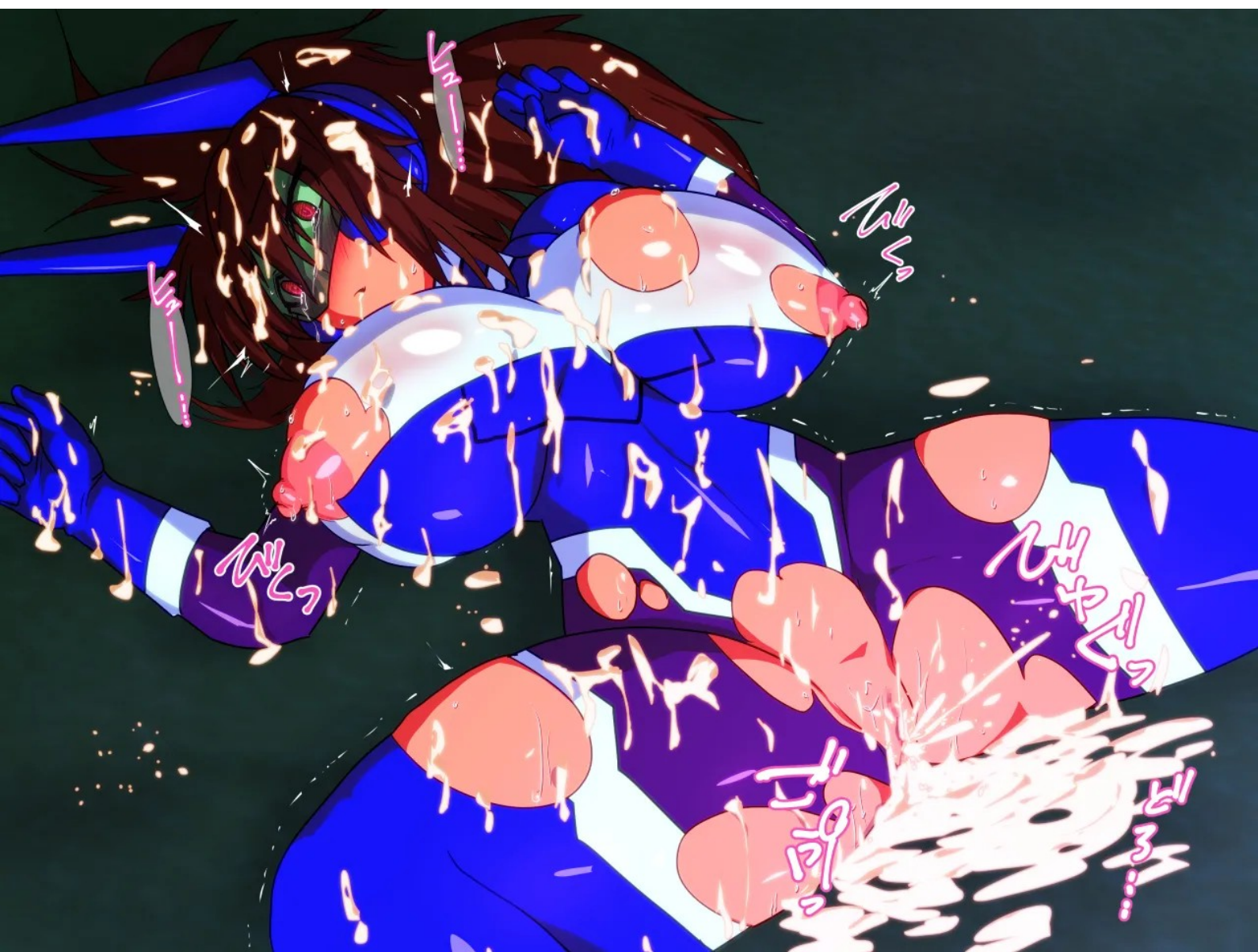


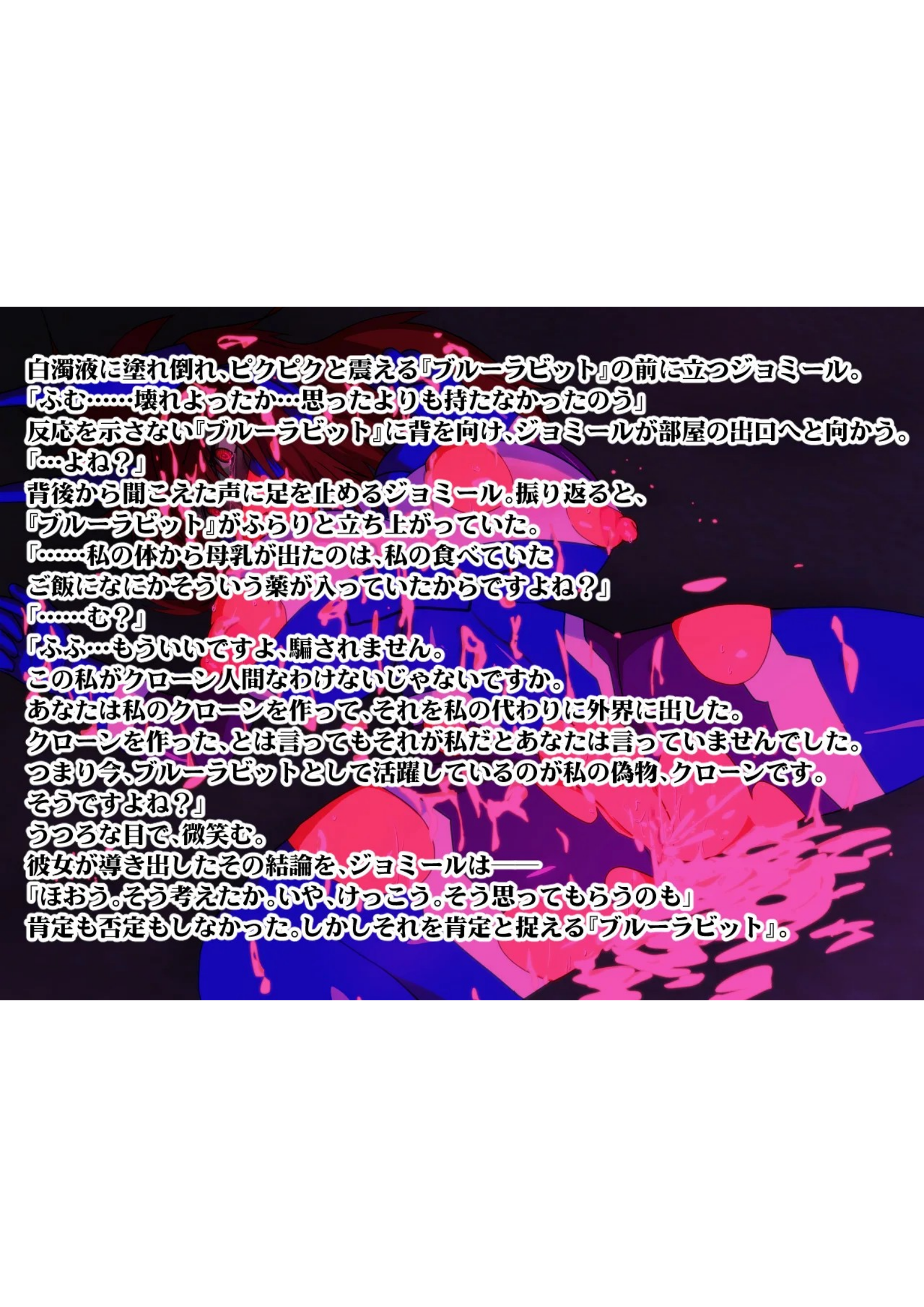


悲しみが、絶望が『ブルーラビット』の心を占めながらも、
躰はこの状況に快楽を押し付けてくる。
正義の戦士と思い込んでいた犯されるだけに
生み出された肉人形の惨めな自分。
同じく犯すためだけに生み出された
最低の肉人形に犯され続ける惨めな自分。
被虐心が、心とは裏腹に悦楽を生む。

あるいは今の状況を慰めるために防衛心が働いてのことか。

実験体達の絶頂、中出しに併せて
『ブルーラビット』もまた、快楽の海に拐われていった。





白濁液に塗れ倒れ、ピクピクと震える『ブルーラビット』の前に立つジョミール。
『ふむ……壊れよかったか…思ったよりも持たなかったのう』
反応を示さない『ブルーラビット』に背を向け、ジョミールが部屋の出口へと向かう。
『…よね？』
背後から聞こえた声に足を止めるジョミール。振り返ると、
『ブルーラビット』がふらりと立ち上がっていた。
『……私の体から母乳が出たのは、私の食べていた
ご飯になにかそういう薬が入っていたからですね？』
『……む？』
『ふふ…もういいですよ、騙されません。
この私がクローン人間なわけじゃないじゃないですか。
あなたは私のクローンを作って、それを私の代わりに外界に出した。
クローンを作った、とは言ってもそれが私だとあなたは言っていませんでした。
つまり今、ブルーラビットとして活躍しているのが私の偽物、クローンです。
そうですね？』
うつろな目で、微笑む。
彼女が導き出したその結論を、ジョミールは——
『ほおう。そう考えたか。いや、けっこう。そう思ってもらうのも』
肯定も否定もしなかった。しかしそれを肯定と捉える『ブルーラビット』。

「あはは！ ほおら。やっぱり。そうとわかったら、偽物を倒さなきゃ。
私のいない間に好き勝手してたみたいですからね。そうだ博士。おかしいんですよ。
このスーツ壊れたのか、スーパーブルーラビットになれないんです。直してください。
偽物を叩きのめして、偽物をあがめた市民のみなさんにもワカらせて……
忙しくなりますよ、博士…うふふふふっ！」
彼女の言葉を聞いてジョミールは口角を上げる。

(この女、自分を博士と呼びおった。なるほど色々壊れてしまったようじゃな。
スーパーブルーラビット……そう。あれの再現だけはわしもできなんだ。
脱出されたあのときしかデータがとれなかったからな…。
それにしても、ブルーラビット…鞠井雪路はたとえ一般市民に犯されたとしても
なにか理由があつてのことと考える性善説の塊のような性格だったな。
今『ブルーラビット』が発言したことは鞠井雪路なら言わないような言葉であることを
本人は気付いているだろうか……?)

くっく、と笑ったあと、ジョミールは『ブルーラビット』に向き合う。
「ああ……そうじゃな。すまんすまん。確かに今外に出ているブルーラビットの方に
スーパーブルーラビットになる機能のスーツを持っていかれていてな。
今のままじゃお前さんも真っ向勝負では勝てんじやろ。
安心せい、わしの力でお前さんのスーツもパワーアップさせてやろう……。
名前を取り返すまではお前さんはブルーラビットではなく——」

深夜の公園のベンチにその男はいた。会社帰りのスーツ姿。
48歳になるが、不祥事を起こしてしまい今は係長。
家に帰れば冷え切った夫婦仲の嫁、
自分を汚物のようにしか見ない娘が待っている。
帰りたくない……男は携帯端末を取り出すと、
違法アダルト動画サイトのページを開く。
そこに投稿されている、一般市民が撮影した
ブルーラビットの戦う動画。
お気に入りのそれはブルーラビットが敵の奸計で
一般市民たちに犯されてしまうもの。
男は端末を片手に、もう片方の手を
ズボンに突っ込み股間を弄る。
『……っ、へへ。クソマゾヒロインめ……。
くそっ、俺にもこの場所に居合わせられたら
俺のちんこでアヘアヘ言わせてやるのにつ…』
男の息が荒くなっていく。
本当ならズボンを脱ぎ捨てて固くなった
陰茎を思う様しごきあげたい。
そして社会的信頼を失って、家族も捨ててやりたい。

『こんばんは、素敵な夜ですね』

不意に声をかけられて、男は思わず跳ね上がった。
先程まで社会的信頼を失ってもいい……
などと思っていたのに、結局こうなる程度の小心者。
慌てて居住まいをただし、かけられた声の方を見ると……

「え、ぶ、ぶ、ぶ、ブルーラビット……？」

今しがた、動画で痴態を見ていた女性が目の前に立っていた。
しかし、電灯の下にいる彼女は普段の様子とは違う装い。
青いスーツが黒く、何より全身を覆っていたはずのそれが
異様な露出度のものになっていた。

「ええ、そうですよ。ブルーラビット。
今あなたがオカズにしていたブルーラビット、ですよお」

唇を指でなぞりながら妖しく笑い、
男に近づくとその手を男の股間に伸ばす。
絶頂前に止められたイチモツはまだズボンの
上からでも熱さが分かる。

「え、な。なにをするんだっ…」

「ナニって……したいんでしょう？ 私と……」

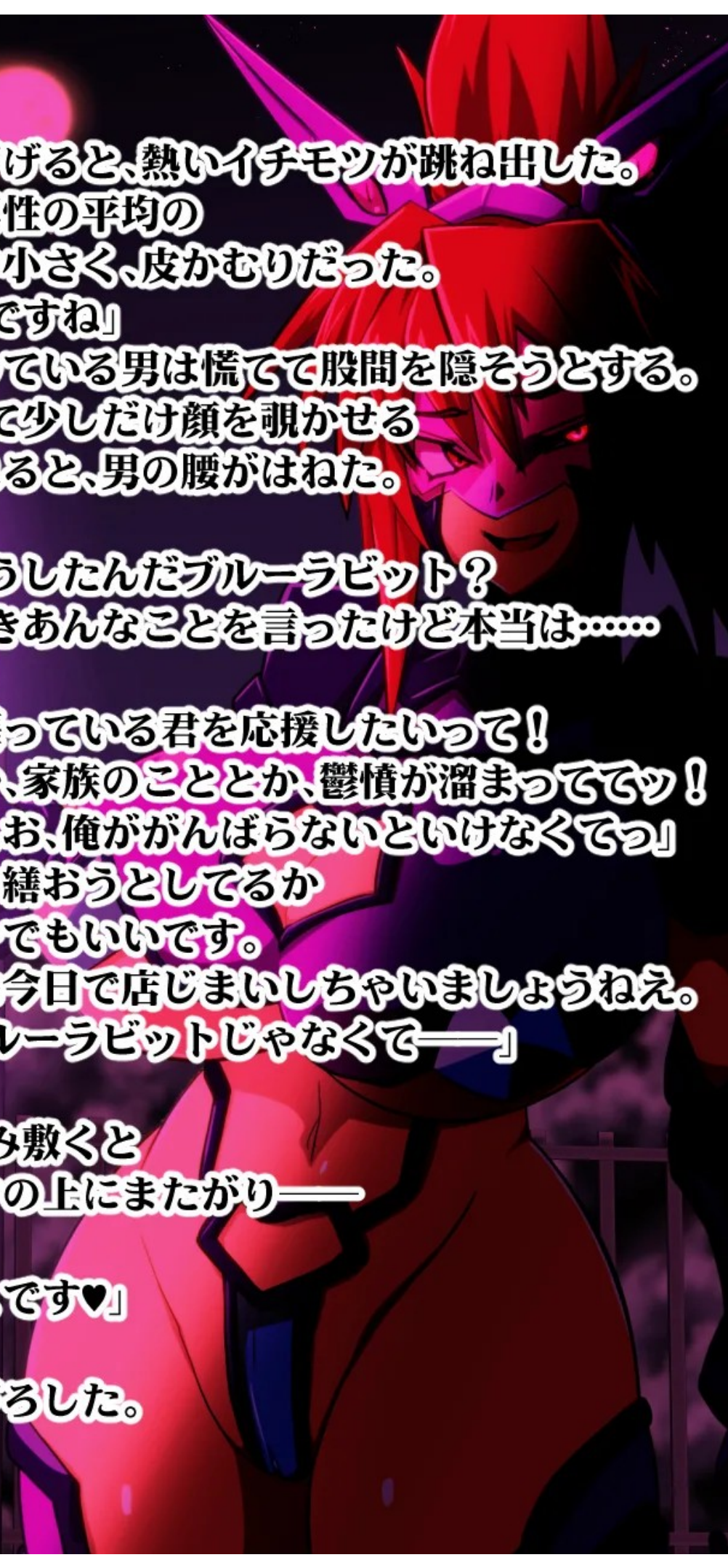
ぞくりとするような微笑み。

「き、君はブルーラビットなんだよな。どうして…」

「どうしてって……？ そんなの簡単ですよ…」



うさぎは
満月の夜に跳ねるもの
——でしょう？



男のズボンをずり下げると、熱いイチモツが跳ね出した。
しかしそれは一般男性の平均の
それと比べてもやや小さく、皮かむりだった。

「ふうん……可愛いですね」

小さいことを気にしている男は慌てて股間を隠そうとする。
しかし、それを遮らで少しだけ顔を覗かせる
亀頭を指でつつかれると、男の腰がはねた。

「ま、待ってくれ、どうしたんだブルーラビット？

お、俺は確かにさっきあんなことを言ったけど本当は……

君のファンなんだ！

そのっ…最初は頑張っている君を応援したいって！

でも日々の疲れとか、家族のこととか、鬱憤が溜まってでっ！

家族だっついて、お、お、俺ががんばらないといけなくてっ」

「もー、ナニ今更取り繕おうとしてるか

知りませんけどどーでもいいです。

立派なおとーさんは今日で店じまいしちゃいましょうねえ。

……あ。今の私はブルーラビットじゃなくて——」

男の言葉を遮り、組み敷くと

そそり立つイチモツの上にまたがり——

「ブラックラビット、です♡」

彼女は一気に腰を下ろした。

無理やり犯されて
気持ちよくなってる
情けないそのカオ♥

んふっ♥
いいですよ
おじさま♥

うああっ

うううっつ!

ひいつ

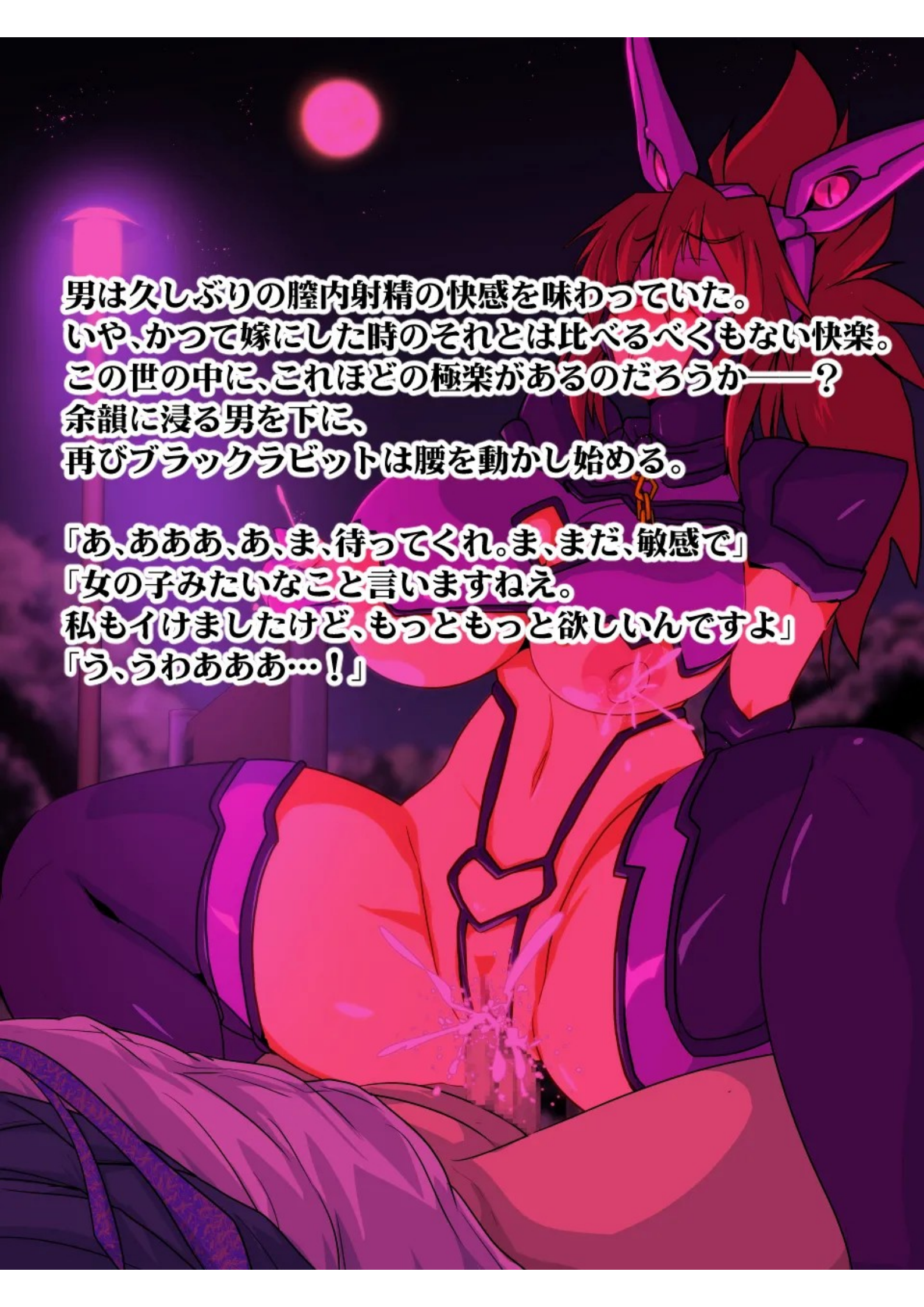


暴力的で支配的な腰のグラインド。
拒否しようにもできない快樂。
男はブルーラビット——
否、ブラックラビットの良いようにされていた。

男は長く嫁とは夜の営みもなく、風俗店に通うこともあった。
しかし、嫁とも、風俗嬢のそれともまるで違う膣圧、腰の動き。
目の前に揺れる2つの大きなメロンの如き乳房の絶景。
画面を見ながら何度も妄想した状況が
ある意味では叶っている喜び。

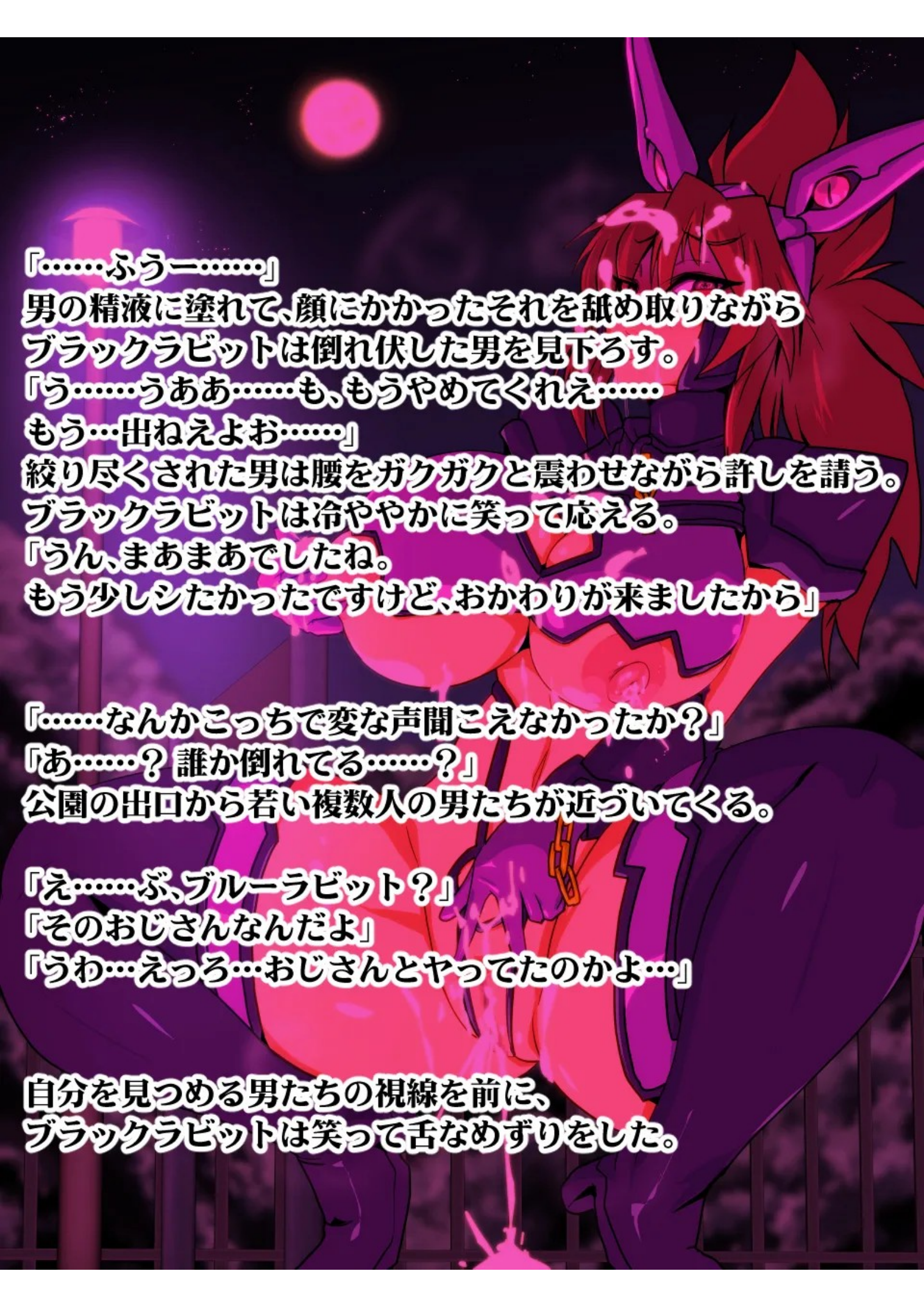
男の絶頂まではそう長くかからなかった。





男は久しぶりの膣内射精の快感を味わっていた。
いや、かつて嫁にした時のそれとは比べるべくもない快樂。
この世の中に、これほどの極樂があるのだろうか——？
余韻に浸る男を下に、
再びブラックラビットは腰を動かし始める。

「あ、あああ、あ、ま、待ってくれ。ま、まだ、敏感で」
「女の子みたいなこと言いますねえ。
私もイけましたけど、もっともっと欲しいんですよ」
「う、うわあああ…！」



『……ふうー……』

男の精液に塗れて、顔にかかったそれを舐め取りながら
ブラックラビットは倒れ伏した男を見下ろす。

『う……うああ……も、もうやめてくれえ……』

もう…出ねえよお……』

絞り尽くされた男は腰をガクガクと震わせながら許しを請う。

ブラックラビットは冷ややかに笑って応える。

『うん、まあまあでしたね。

もう少しシたかったですけど、おかわりが来ましたから』

『……なんかこっちで変な声聞こえなかったか？』

『あ……？ 誰か倒れてる……？』

公園の出口から若い複数人の男たちが近づいてくる。

『え……ぶ、ブルーラビット？』

『そのおじさんなんだよ』

『うわ…えっろ…おじさんとやってたのかよ…』

自分を見つめる男たちの視線を前に、

ブラックラビットは笑って舌なめずりをした。

うふふ…♡

みなさんも
見てるだけじゃなく
一緒にどうですか？

そこで転がってる
おじさんみたいに
ザーメンぜんぶ
私のおまんこの中に
射精したくませんか…♡

ほろろ…♡

ぱんちゅりゃん

ぽたぽた



——狂乱の夜はまだ続く。

青い兎と黒い兎。
本当の鞠井雪路を決める戦いの幕があがろうとしていた——。

























